Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-04-04

古人になぞらえる : 近世日本漢詩文作者の自己像と擬古（小特集 : 近世文芸の作者の〝姿勢(ポーズ)〟: 序文を手掛かりとして）

山本, 嘉孝

(Citation)
國文論叢別冊,1:17-23

(Issue Date)
2023-09-30

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/0100483226

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100483226

■小特集　近世文芸の作者の〝姿勢（ポーズ）〟――序文を手掛かりとして

古人になぞらえる

――近世日本漢詩文作者の自己像と擬古

山本嘉孝

はじめに

漢詩文作者は、どのようなポーズを取りながら漢詩文を制作することがあるのか。この問いについて考える上で、一つの手がかりとして想起されるのが、作者が自身を古人になぞらえ、古人のふりをしながら制作する擬古的な詩文である。「擬古」は、「古に（いにしへ）擬ふ（なぞらふ）」と訓ずることが可能であり、「擬ふ」には、「模倣する」に加え、「ふりをする」、「たとえる」、「引き比べる」などの意味がある[1]。本稿でも、このような複合的な意味を持たせて「なぞらえる」の語を用いることとする。

日野龍夫氏は、荻生徂徠門下の服部南郭による漢詩に見られる「擬古主義」に注目され、過去の詩人を模倣する表現の中に「自己を古人に虚構するナルシシズム」を見出された[2]。一方、本稿筆者は拙著で、近世日本における擬古的な漢詩文には、日野氏が示唆されたような現実と隔絶された「虚構」への逃避というよりも、現実世界における生き方を模索するための方法としての側面が認められることを指摘した[3]。

ただ、虚構と現実は表裏一体の関係にあり、片方からもう片方を離すことはできない。日野氏が擬古的な詩文の虚構性を殊更に強調されたのも、服部南郭について「古代のイメージは虚構として対象化されず、南郭の現実を覆ってしまう」と記されたことが示唆するように、擬古の虚構性が現実に強く作用し得ることを把握されていたからではないだろうか[4]。本稿では、擬古的な詩文が、作者の体験していた現実と密接に接合する場合も存在したことに注目し、近世日本の漢詩文作者が擬古的な漢詩文制作を行いながら、現実世界における自己像と生き方を探った様相について検討する。以下、林鵞峰が平安貴族に、そして新井白石と荻生徂徠が李白に、自身をなぞらえた事例を取り上げる。なお、第一・二節は拙著に既出の内容に基づくが、第三節の論は新出である。

一、平安貴族になぞらえる――林鵞峰

近世日本における擬古的な漢詩文制作の淵源は、初期林家にある。特に二代目の林鵞峰は、平安時代の漢詩文を意識的に模倣することで、儒学・漢詩文が栄えた平安時代の朝廷を思慕し、自身

を平安貴族になぞらえた。それにより、中世に儒学・漢詩文を担っていた五山僧と自身を差別化し、新しい時代の幕府儒臣としての自己像を創出したのである。

大曾根章介氏が紹介し、宮崎修多氏が詳細に考察され、また拙著で近世日本における擬古的な漢詩文制作の早い例として位置づけた『擬内宴詩集』（写本一冊、国立公文書館蔵）は、寛文六年（一六六六）三月、『本朝通鑑』の編纂に当たっていた林鵞峰が、同僚・門人らとともに平安時代の天皇と公家に扮して制作した詩と詩序を収める。[5]

都合二十八首の漢詩の各首には、作者名として架空の公家の位階・官職・姓名が記され、実際の作者が誰であったかを示す一覧が巻末に載る。例えば、鵞峰が作った漢詩は、天皇による第一首（「御製」と記される）、「一品中務卿親王明具」による第三首、「正四位下遣唐押使臣多治比真人古根」による第十三首、「正七位下明法博士臣坂上宿禰堅盤」による第二十六首であり、鵞峰の子、梅洞が作った漢詩は、「関白従一位左大臣臣藤原朝臣忠照」による第三首と「正四位下左衛門督臣物部連好武」による第十四首であった。架空の天皇と公家が生きた時代について明記されていないが、内宴の儀式は平安時代の朝廷で催され、その後は途絶えた。[6]よって、鵞峰たちは平安時代の天皇と公家のふりをして、これらの漢詩を制作したといえる。

人見竹洞による跋文「擬内宴詩巻跋」には、天皇や公家の漢詩を模擬するという僭越について弁明している。[7]竹洞は、主として二つの論点を提示する。

一つ目は、優れた政治が行われている時代には、自ずと文化が豊かになる、という論点で、平安天皇の治世に引き比べられるほど徳川将軍の治世が優れていることをいう。平安時代には礼楽と文物が盛んになり、朝廷が文人たちで溢れたが、その後、戦乱の世に転じてからは文物が衰えた、とする。しかし徳川家の治世によって泰平の時代が再来し、「珥筆之徒満堂」（筆を珥（さしはさ）む の徒、堂に満つ）、すなわち多く文人が（幕府に仕える林家に）集っていることが記される。

二つ目の論点は、漢詩文作者には「擬而作者」（擬して作る者）が多い、というものである。竹洞が例として挙げるのは、文では『易経』になぞらえて『太玄経』を書き、『論語』になぞらえて『揚子法言』を書いた前漢の揚雄、六経になぞらえて六書を書いた隋代の王通、また詩では「擬古」詩を作った六朝時代の陶淵明（『文選』巻三十・雑擬上）、曹操周辺の文人たちの詩になぞらえて「擬魏太子鄴中集詩」を作った六朝時代の謝霊運（『文選』巻三十・雑擬上）、一首ごとに古代から南朝宋まで様々な詩人の口吻を真似て「雑体詩」三十首を作った六朝時代の江淹（『文選』巻三十一・雑擬下）である。

『擬内宴詩集』が主として漢詩から成ることに鑑みると、注目すべきは『文選』所収の模擬詩への言及である。和田英信氏は、謝霊運の「擬魏太子鄴中集詩」について、「似せようという意識とはいささか異なる創作意識が想像される。詩作の背景には、文学を媒介として結ばれた建安文人の深い絆に対する、謝霊運の敬慕の念があるだろう」と指摘されている。[8]模倣は敬慕の念と不可分である。林鵞峰らは、平安貴族の詩文を模倣し、思慕することで、彼らと並ぶ者としての自己像を形成し、五山僧たちとは異なる存

在として、現実世界、すなわち徳川時代の社会と学界の内に自身たちを位置づけようとした。

イフォ・スミッツ氏は、鵞峰と子の梅洞が歴代の日本漢詩を集めて編纂した総集『本朝一人一首』が、平安時代を中心とする朝廷の漢詩を大量に収めるのに対し、五山僧の作を採録しないことに注目され、林家にとって、世襲の儒官として仕えた平安文人が、敬慕かつ模倣すべき対象であったと指摘されている。[9] 鵞峰とその父、羅山は、五山僧の時代には途絶えてしまった、奈良・平安時代の朝廷で行われた釈奠（孔子祭礼）や漢詩文制作のあり方を意識的に模倣・思慕・再興することで、戦乱の世に遭い文物の零落を防げなかった仏僧たちと、太平の世にあり文物の興隆に寄与する自身たちを差別化した。[10] それによって、社会の安定と繁栄に寄与する幕府儒臣としての自己像を堅固なものにしていったのであり、平安漢詩の模倣も、その一環であった。

以上のように考えると、架空の平安貴族のふりをするという『擬内宴詩集』の虚構性が、実は現実世界と連動するものであったことが窺える。擬古は、作者が古人を思慕しながら、自身をその古人と並ぶような存在として認識することを可能にし、作者が現実世界を生き抜くための心理的また思想的な支えを提供する表現と思考の型であった。

二、李白になぞらえる（一）——新井白石

鵞峰のすぐ次の世代の漢詩文作者たちは、平安漢詩文を模倣・思慕の対象とはしなかった。漢詩についていえば、木下順庵門下の儒者たちや、荻生徂徠とその門人たちが、李白や杜甫を筆頭とする盛唐の詩人を模倣・思慕の対象とした。盛唐詩を模倣することは、盛唐の詩人たちを思慕することであり、後述するように、新井白石や荻生徂徠にとっては、自身を例えば李白になぞらえることが、現実世界における自己像の形成と関係していた。

正徳三年（一七一三）、幕府儒臣を務めていた新井白石の宅を会場に中秋の詩宴が開かれた。主催者は江戸の薬種屋、益田鶴楼であった。鶴楼は、白石から漢詩制作を学んでおり、二十年以上にわたって毎年のように中秋の宴を設けてきた。白石をはじめとする木下順庵門下の幕府儒臣たちが集っており、白石は左の漢詩を作って旧友たちとの宴をことほいだ。『白石先生余稿』（享保二十年〈一七三五〉刊）巻二から引用する。

新井白石「癸巳中秋小集」

二十二年秋　二十二年の秋
年年醉鶴楼　年年鶴楼に醉ふ
梅花江上笛　梅花　江上の笛
桂樹淮南謳　桂樹　淮南の謳
不恨催衰老　恨みず　衰老を催すことを
何妨及勝遊　何ぞ妨げん　勝遊に及ぶことを
幸将今夕月　幸ひに今夕の月を将て
更喜故人留　更に喜ぶ　故人の留まることを

（五言律詩、仄起式、下平声十一尤韻〔秋・楼・謳・遊・留〕）

この詩の詳細な読解は、拙著で行った。[11] ここで特に指摘したいのは、頷聯（すなわち第三・四句）で、白石が殊更に李白の詩作

を真似した点である。「梅花」・「江」・「笛」の語は李白「与史郎中欽聴黄鶴楼上吹笛」（『唐詩訓解』巻七）の第三・四句に、「桂樹」と「淮南」の語は李白「寄淮南友人」（『分類補註／李太白詩』巻十三）の第七・八句に用いられた語である。白石は李白の詩語を切り貼りしながら、李白を模倣し、いわば李白のポーズを取った。この聯の大意は、長江に臨む黄鶴楼で演奏されたという笛の曲「梅花」が響き、月にも淮南にも生えるという桂樹のもとで（すなわち月を眺めながら）詩を詠ずる、という内容で、黄鶴楼と鶴楼をかけながら主催者鶴楼へのオマージュを表現し、中秋の明月が照る中で詩を詠み交わすことのすばらしさをいう。しかし白石はなぜここで、殊更に李白を模倣したのか。

第三句の「江上」の語は、李白「江上吟」（『唐詩訓解』巻二）を想起させる。白石ほか、この詩宴に集った人々がよく読んでいた『唐詩訓解』に載る注によれば、「江上吟」は、李白が朝廷での役職を辞して失意の中にいた時、「我又何必眷眷于朝廷乎。惟以詩酒自娯耳」（我又た何ぞ必ずしも朝廷に眷眷たらんや。惟だ詩酒を以て自ら娯しむのみ）、つまり朝廷のことでくよくよせず、詩と酒を自分で楽しもう、と思って作ったとされる。

この詩宴が開かれた前年、白石の主君、六代将軍徳川家宣が没した。その結果、幕府での白石の立場は危うくなり、自身の政策提言に耳を傾ける者もいなくなっていた。白石は、「江上吟」に描かれたような李白の姿に自身をなぞらえ、幕府のことでくよくよせず、詩と酒を楽しもう、という決意を示したのである。「江上吟」には、舟に乗り、簫や笛がにぎやかに響くなか、酒を楽しみ、詩を作る李白自身の姿が描かれている。白石も、鶴楼が主催した詩宴で、作詩と飲酒を楽しんだ。白石が実際に経験していた状況と感情は、李白のそれと一致していたからこそ、白石は李白を模倣し、自身を李白に見立てた。

少なくとも、白石の旧友で同じく幕府儒臣の室鳩巣は、白石が自身を李白になぞらえたことを察知したと思われる。鳩巣は、七言絶句「観白石中秋詩有感五首」其五（『鳩巣先生文集』後編〔宝暦十三年〈一七六三〉刊〕巻二）の第三・四句で、「近来風義多零落、珍重汪倫識謫仙」（近来風義多く零落す、珍重す汪倫謫仙を識ることを）と詠じ、白石を李白（謫仙）に、鶴楼を李白に酒を飲ませた汪倫に見立てている。「風義」は、李白が讒言により皇帝の寵愛を失った経緯が詠まれる李白の五言古詩「答高山人兼呈権顧二侯」（『分類補註／李太白詩』巻十九）に用いられる語で、鳩巣は、白石を李白にたとえつつ、鶴楼が相替らず酒を振舞ってくれたことを祝している。これは、白石が自身をさりげなく李白になぞらえたことに対する、気の利いた応酬として解せる。

三、李白になぞらえる（二）――荻生徂徠

白石や鳩巣と同じく、荻生徂徠も、李白の作をはじめとする盛唐の詩を模倣して漢詩を制作した。ただし本節で取り上げるのは、漢詩ではなく漢文である。

徂徠の門人に、河内西代藩主や幕府の小姓・若年寄、伊勢神戸藩主などを歴任した本多忠統がいる。忠統に徂徠が宛てた一連の漢文書簡は、「与猗蘭侯」と題されて『徂徠集』（寛政三年〈一七九一〉刊）巻二十・書牘に収められている。第四首は、忠統の酒宴に参加させてもらったことを感謝する内容で、冒頭には、徂徠

が泥酔して午前様に帰宅し、日暮れまで眠ってしまったことが記される。続けて、忠統から与えられた文房具をなくさず持ち帰ったこと、忠統のために漢詩を作ったこと、そして忠統と「布衣の交はり」すなわち身分の差に関係ない交流を持てていることの有難さについて、次のように書かれている。

所賜彩筆彩箋文石之椀、幸亡所遺失、携帰、照耀乎文房之中。乃知併与満庭瓊瑶、皆君侯之賜也。漫成一絶奉覧。雖然、小人亡頼、踞文茵、擁彫炉、傲睨自若、則君侯迺捧硯行酒。布衣交弗若也。（賜ふる所の彩筆、彩箋、文石の椀、幸ひに遺失する所亡く、携へて帰りて、文房の中を照耀す。乃ち知る、併びに満庭の瓊瑶と与に、皆君侯の賜なるを。漫りに一絶を成して覧に奉ず。然りと雖も、小人は亡頼にして、文茵に踞し、彫炉を擁し、傲睨自若たれば、則ち君侯迺ち硯を捧げて酒を行かしむ。布衣の交はりは若かざるなり。）

注目したいのは「捧硯」の二字である。これは、李白が楊貴妃に硯を両手で持たせた故事に基づく。宋・潘自牧（編）、明・王嘉賓（補）『記纂淵海』巻四十九・不屈に、「曽令龍巾拭吐、御手調羹、貴妃捧硯、力士脱靴」（曽て龍巾をして吐を拭かしめ、御手をして羹を調へしめ、貴妃をして硯を捧げしめ、力士をして靴を脱がしめ）云々とあり、玄宗皇帝の布で口を拭き、玄宗皇帝に料理をしてもらい、楊貴妃に硯を持ってもらい、宦官の高力士に靴を脱がしてもらったことなどについて、県令に提出した陳述書に李白が自身の履歴を記した逸話が載る。徂徠は自身を李白になぞらえ、身分の高い武家である忠統の寵愛を受け、歓待してもらったことを「捧硯」の二字で表現したといえよう。「捧硯」は、李白自身が記した文に載るとされる語である。徂徠はこの語を李白の文から切り貼りし、李白を模倣したともいえるため、たった二字とはいえ、擬古的な表現と見做せる。忠統が徂徠のために本当に硯を持ったかは分からない。これが擬古の虚構性である。ここに垣間見えるのは、自身と忠統の関係を李白と楊貴妃の関係になぞらえた、徂徠の擬古的な表現と思考である。

拙著でも記したように、李陽冰「唐翰林李太白詩序」（『分類補註／李太白詩』首巻）に載る李白の伝記によれば、李白は庶民の出身であったが、玄宗皇帝に才能を買われ、朝廷で文書を起草し国政について諮問を受ける役職に抜擢されて、高貴な人々と交わった。しかしその後、同僚の讒言に遭い、朝廷を去って民間に戻ることとなり、作詩と飲酒に興じた[12]。白石や徂徠などは、第一節で取り上げた林鵞峰が世襲の幕府儒臣として安定した地位を得ていたのとは対照的に、何の後ろ盾もないまま、自身の才能だけを頼りに身一つで将軍や大名に仕官ないし接近した。その立場は不安定であった。主君が没するか失脚すれば、経世済民に関与する儒者として活躍できる場が失われる危険と常に隣り合わせだったためで、白石については前節で見た通りである。徂徠も、仕えていた柳沢吉保が失脚した後には在野の儒者に転じた。一時は為政者に仕えて政事の場に臨むほどの才能を持っていながら、運命の巡り合わせによって在野の一般人に舞い戻った李白の姿に、白石や徂徠のような、世襲ではない儒者たちはひそかに共感し、自身をなぞらえやすかったと思われる。徂徠が右の書簡で自身を「亡頼」

すなわち定職に就かないゴロツキと呼んで自嘲したのも、故なしとしない。

日野氏が取り上げた服部南郭は、政事とは無関係のように思われることもあるが、もとは徂徠と同じく柳沢吉保に仕えていた身であり、南郭が李白のような詩人に自身をなぞらえることが全くの絵空事であったとは思われない。李白は初めから詩酒に耽溺していたのではなく、不遇であったからこそ詩を大量に作り、大詩人となった。しかも自身の不遇を嘆くのではなく、むしろ自由な身を楽しみながら風流に没頭した。このような姿勢は、本稿で見た白石や徂徠だけでなく、南郭にも見られないだろうか。

ただし、時代が下り、南郭の門人たちの世代以降になると、拙著でも触れたように、盛唐詩の模倣が形骸化し、現実世界の生き方と結びついた擬古のあり方は希薄になっていったと考えられる。[13] 擬古的な漢詩制作が、表現・思考というより技芸・芸道の型として、儒者でない一般の人々に広がったことが背景にある。また、白石・鳩巣・徂徠らが学んだ、詩人の伝記を根拠に詩を解釈する注を載せる『唐詩訓解』に代わり、何の注も載せない『唐詩選』が作詩の手本として広まったことも要因であったろう。

おわりに

本稿では、近世前期〜中期日本の三名の儒者、林鵞峰・新井白石・荻生徂徠の擬古的な漢詩文を取り上げ、鵞峰・白石・徂徠がそれぞれ古人の漢詩文を模倣し、その古人を慕い、自身をその古人に見立て、引き比べることで、現実世界における自己像を確立し、自身の生き方の指針を獲得した事例を検討した。他の様々な（形骸化していない）擬古的な漢詩文の事例も検討すべきではあるが、それらに通底する思想は、『論語』述而篇に記される「述而不作。信而好古。窃比於我老彭」（述べて作らず。信じて古を好む。窃かに我が老彭に比す）という孔子の言葉に集約されるであろう。[14] 古の優れたものを伝えるのみで、自らは新しく作らない者としての孔子の自己像は、それだけでも擬古に通ずるが、老彭という古人に自身を引き比べながらその自己像を補強する点も擬古的といえる。日本を含む漢字圏における擬古の性質については、様々な時代と地域の漢詩文、また漢詩文以外の著述や文芸、絵画、演劇などとも比較しながら、今後も検討を続ける必要がある。[15]

注

（1）『漢辞海』第四版（三省堂、二〇一七年）「擬」項参照。

（2）日野龍夫「擬古主義とナルシシズム――服部南郭の創作意識」『江戸の儒学』日野龍夫著作集第一巻（ぺりかん社、二〇〇五年、初出一九六六年・一九七二年）、一九九頁。

（3）山本嘉孝『詩文と経世――幕府儒臣の十八世紀』（名古屋大学出版会、二〇二一年）、二八－一五四、三五四－三六〇頁。

（4）日野龍夫、前掲論文、二一三頁。

（5）大曾根章介「『本朝一人一首』と『史館茗話』――林家の日本漢文学研究について」『日本漢文学論集』第一巻（汲古書院、一九九八年、初出一九八一年）。宮崎修多「国風・詠物・狂詩――古文辞以前における遊戯的漢詩文の側面」『語文研究』第五十六号（一九八三年）。山本嘉孝、前掲書、七〇－七三頁。

（6）一条兼良『公事根源』（写本、国立公文書館蔵、林羅山旧蔵）の「内宴」条に「保元に信西申行侍し後は、たえて侍にこそ」とある。

（7）山本嘉孝、前掲書、七〇－七二頁。
（8）和田英信「コラム 模擬」『文選 詩篇（六）』（岩波書店、二〇一九年）、四一二頁。
（9）“The court scholar-poets of classical Japan best embodied the ideal of the exemplary, and often hereditary, court officialdom (*jukan*) that the Hayashi house attempted to emulate.” Ivo Smits, “Minding the Gaps: An Early Edo History of Sino-Japanese Poetry.” Anna Beerens and Mark Teeuwen, eds., *Uncharted Waters: Intellectual Life in the Edo Period* (Brill, 2012), p. 105.
（10）山本嘉孝「林羅山・鵞峰による奈良・平安朝の思慕」『斯文』第一三八号（二〇二三年）掲載予定。
（11）山本嘉孝、前掲書、一三〇－一五四頁。
（12）山本嘉孝、前掲書、一四四－一四五頁。
（13）山本嘉孝、前掲書、二九〇、三〇七、三〇九頁。
（14）加地伸行氏の御教示による。
（15）門脇むつみ氏は、単著『寛永文化の肖像画』（勉誠出版、二〇〇二年）において、近世前期日本の文化人たちの肖像画を分析されるなかで、「像主を特定の古人になぞらえる擬古の仕掛け」（七頁）が見られることを論証され、「現実の人物を特定の故事人物などに擬す風潮」（四二頁）が幕臣佐久間将監（一五七〇～一六四二）の周辺に見られる、との重要な指摘を行っておられる。本稿著者の不勉強により、門脇氏の論については、拙著『詩文と経世』で日本近世漢詩文における擬古について論じた後で知ることとなったが、符合する部分が多くあり、擬古の問題については美術史と文学の双方の分野にわたって検討を続ける必要がある。また、擬古と関連づけられることの少ない唐宋古文を手本とした漢文作文においても、作者が自身を古人になぞらえる事例が見られる。作者が韓愈の文を模倣しながら自身を韓愈になぞらえたと考えられる例については、山本嘉孝「目安箱と韓愈――室鳩巣における唐宋古文・朱子学・経世の連関」（東英寿編『唐宋八大家研究』〔中国書店、二〇二二年〕）参照。

〔附記〕本特集のもととなったシンポジウムには、在外日本古典籍調査と日程が重なったため登壇が叶わなかった。それにもかかわらず、本特集に寄稿させて頂く機会を下さった有澤知世氏に深く感謝申し上げます。

（やまもと　よしたか／国文学研究資料館准教授）